

『放送史料集 台湾放送協会』 ～「外地」放送史料から(1)～

メディア研究部 吉田 功

はじめに

NHK放送文化研究所では、戦前から戦中にかけて台湾や南洋諸島といったいわゆる「外地」で行われた放送に関する史料を収集し、それらを取りまとめた史料集を編纂してきた。「放送史料 探訪」では、今回からシリーズで「外地」放送史料を紹介していく。1回目は『放送史料集 台湾放送協会』（1998年）を取り上げる。同史料集は、満州（Ⅰ～Ⅲ、1979年～80年）、豊原（1971年）、パラオ（1972年）に続く4番目のもので、外地の放送を扱った史料集としては最も新しいものである。



『放送史料集 台湾放送協会』

台湾放送協会は1931年2月、日本の植民地であった台湾において、社団法人として設立され、敗戦後、1945年10月まで活動していた。台湾放送協会は台湾総督府の管理下にあり、予算などの経営において「官営放送」であった。番組編成、放送技術などにおいては日本放送協会の影響下にあったが、台湾の情勢に合わせて、独自の活動を展開していた。『放送

史料集 台湾放送協会』は、そうした台湾の放送事業のみならず、日本の台湾統治政策も知ることのできる史料である。

史料集の概要

史料集は、34ページの解説編、138ページの史料編、43ページの統計・図表編の3部構成になっている（表）。

解説編は収録した史料の性格を概説するとともに、台湾放送協会の事業内容を、施設、番組、聴取者などの分野に分けて、時代ごとの変遷を概観している。本史料集の中核となる史料編では、協会の業務資料（「事業並会計報告書」など）が掲載され、それまでは十分に明確ではなかった太平洋戦争期の放送事業も明らかにされている。統計・図表編では、さまざまな史料をもとに、新たに統計・図表を作成して台湾放送協会の実態を表している。

表 『放送史料集 台湾放送協会』の構成

Ⅰ 解説	一 収録した史料について		
	二 日本統治時代の台湾と放送		
	台湾の放送	台湾統治五〇年	
		放送の開始	
		放送施設の拡充	
		放送番組	
		聴取者の普及	
		台湾放送協会の組織と財政	
戦争と台湾放送協会			
Ⅱ 史料	府令・告示		
	社団法人台湾放送協会定款		
	台湾放送協会・事業並会計報告書		
	台湾放送協会事務規程		
	台湾放送協会報		
	台中放送局の思い出		
Ⅲ 統計・図表	業務組織の変遷		
	地図		
	番組統計・放送時刻表		
	人口統計ほか		
台湾放送協会年表			

解説編

解説編では、1895年から1945年までの日本による台湾統治の歴史と、その中での放送事業の役割とその変化を記している。

台湾放送協会が発足した1931年の時点では、「日本人と台湾人は言語・習俗・趣味・嗜好などを異にし、(中略)この両者を総合統一する形式を創案し、『内台融和』を図る必要がある」状況だった。そうした中で、台湾放送協会は「台湾人向け番組と日本人向け番組との編成のバランスには苦心した」と記述されている。

台湾統治においては、総督府が展開していた皇民化運動では日本語使用が強制されたものの、放送では逆に「台湾語による放送も盛んに行われ」始めた。日本語を理解できる台湾の人々は少なく、このため「台湾人から戦争への協力を取りつけるためには、『国語(日本語)普及』を待ってはいられなかった」ことが背景にあった。台湾の状況に、放送が合わせざるを得なかったのである。台湾統治と放送の関係性を俯瞰できる内容となっている。

史料編

史料編の中心になっているのが、台湾放送協会の公式業務資料である「事業並会計報告書」(昭和十一年度～昭和十八年度)と「台湾放送協会報」(昭和十七年～昭和二十年)である。これらは台湾放送協会東京駐在員であった小倉博氏から新たに提供を受けた。

前者は年度ごとに監督官庁に協会の活動を報告する「もっとも基本的かつ公式的な記録」である。後者は「事業上必要ニシテ部内一般ニ公示ヲ要スル」ことを掲載する「部内報」である。

ここで関心をひくのは、台湾から中国大陸

などに放送されていた海外放送の「新設、改定に関するもの」である。太平洋戦争開戦直後から拡充を図り、定期的に英語、タガログ語、オランダ語、北京語、広東語などのニュースを放送した(「昭和十六年度事業並会計報告書」)。その後、大陸向け中国語放送を拡充していく(「会報第一号昭和十七年七月一日 海外放送ノ時間改正ノ件」)。台湾周辺は、当時、中国・重慶政府、英国、米国などの短波宣伝放送が「鎬^{しのぎ}を削って」いる状況であった。史料からは台湾放送協会がこれらに対抗する使命を帯びて活動している実態がわかる。

統計・図表編

ここには、放送局が置かれた場所を示す地図や、番組に関する統計、聴取加入者数の推移などがまとめられている。このうち、台湾放送協会の定時番組をまとめた「放送時刻表」(1932年～44年)からは、戦時色が強まるにつれて、台湾向け放送で日本語のほかに、台湾で使われていた福建語や広東語の放送が増加していったことがわかる。

まとめ

『放送史料集 台湾放送協会』は、植民地政策の一環としてなされた放送事業の実態を知るための貴重な記録である。戦時色が強まり日本語への統一を図る皇民化政策の方向とは逆に、台湾の放送では統治および宣伝の役割を十分に果たすために、むしろさまざまな言語を使った内容へと変化していったことを示している。史料集からは、放送が植民地支配における文化政策として使われた具体的な側面が浮かび上がってくる。

(よしだ いさお)